

和辻哲郎『風土』の諸問題

湯 浅 弘*

Problems of Watsuji's *Fūdo*

Hiroshi YUASA

要 旨

『風土』において和辻哲郎は人間存在の時間性と空間性、歴史性と風土性を機軸とする人間存在論を提示した。その人間存在論は、ハイデガーの『存在と時間』の批判的摂取を前提としたもので、現象学的解釈学の系譜に属する人間存在論と見ることができる。そうした思想史的な系譜からも窺えるように、『風土』での和辻の基本的なスタンスは、デカルトに端を発する主客二元論に抗して人間の生の具体的現実的定位し、その構造を明らかにしようとした点に求められる。和辻は、自らのヨーロッパ留学体験をもとに風土の三類型を提示しつつ、人間の生の必須の構造契機として人間存在の歴史性・風土性を明らかにしようとしたのである。その試みは、言わば、空間（時間を含んで）を生きる人間の生と人間によって生きられる空間（時間を含んで）との密接不離の関係を探查する試みであったと見ることができる。本論文は、風土論としての先駆的な業績である『風土』を和辻の倫理学体系の成立と絡めながら、『風土』の諸問題について若干考察しようとするものである。

キーワード：和辻，風土，歴史，倫理学，解釈学

1 『風土』はどう読まれてきたか？

『風土』は、和辻哲郎の著作のうち『古寺巡礼』とならんで多くの読者にめぐまれてきた著作の一つであると思われる。初版は昭和10年に刊行されたが、現在でも文庫等で発刊されており、なお読み継がれている。また、部分訳も含めれば英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語等に翻訳され、広く海外にも紹介されている。

*助教授 人間学・哲学

こうした経緯は、『風土』という著作の持つ魅力が広く受け入れられてきたことを端的に物語るものであろう。きわめてラフな言い方をすれば、その魅力は著者和辻のものを見る眼の確かさ、みずみずしさ、自在さ等々、和辻のすぐれた眼力と表現力に由来すると思われる。ヨーロッパ留学のための船旅やヨーロッパでの見聞を土台とし、行く先々での自然と人間と文化的産物とをその結びつきにおいて描写する『風土』は、『古寺巡礼』と同様に和辻一流のすぐれた眼力と表現力の所産という一面を持っている。そうした特性を持つ『風土』は、あたかも和辻とともに旅をしているかのような錯覚に読者を引き込むだけの力を持った一種の旅行記としての一面を持つ。『風土』は、まずは、『古寺巡礼』の場合にも似てそのような旅行記として広く受け入れられてきたと推測される。

『風土』はこのようにヨーロッパ留学という和辻の実体験を一つの土台として書かれた著作である。だが、それはむしろ、自らの個人的な体験をなぞりかえすだけの単なる旅行記にとどまるものではない。モンスーン、砂漠、牧場という『風土』が提示する風土の三類型は、和辻の実体験を基盤としつつも、実体験の蓄積から構想された風土の三つの型、文化の三つの型に他ならない。モンスーン、砂漠、牧場とは、それぞれ南アジア、西アジア、ヨーロッパでの実体験の昇華において和辻が提示した、言わば風土の理念型、文化の理念型であって、『風土』の読者はこれらの理念型を通じて自らが帰属する風土と文化、そしてそれとは異なる風土と文化それぞれの特質を理解するための手引きを手にすることができたと言えよう。『風土』は、このような脈絡で見るとき、風土と文化の多様性に着目したすぐれて比較文化論的な試みとして位置付けられる。『風土』は、第二には、このような比較文化論の古典として、しかも日本人の手になる最初の本格的な比較文化論として広く読まれてきたと言えるだろう。

『風土』が広く受容されてきた経緯は、大凡以上のように描き出せる。それは旅行記として、そして比較文化論として読まれてきた。だが、旅行記として見た場合は措くとしても、学問的な比較文化論として見た場合『風土』での議論に幾つかの難点があることも事実である。また、『風土』にはそもそも旅行記や比較文化論といったカテゴリーだけでは括り得ない面があることも同じく否定しがたい事実である。これらの点を考慮するなら、『風土』に対してなお別のアプローチが必要とされることは明らかである。

『風土』という著作の持つ難点や一般にはあまり理解されていない面については、これまでも『風土』に対する批判を通じて度々指摘されてきたところである。

それらの批判は、大きく三つの系列に分類される。まず第一の系列の批判は、和辻の議論には、自然環境の特性からそこに住む人間の特性や文化の質を直接導出しようとする地理学的決定論が含まれているというものである¹⁾。また、もう一つ別の系列の批判は、異文化理解の手

続き上の不備を突いているもので、和辻が異文化に帰属する人々の主観性の在りようをその内側から理解するのではなく、無自覚のうちに観察者である和辻自身の主観性を投影して異文化理解としていると見て、その点を問題視するものである²⁾。そしてさらに第三の系列の批判としては、和辻が風土と文化の多様性を承認しながらも、暗黙のうちに日本文化の特殊性を際立たせている点を問題と見るものが挙げられる³⁾。

前二者は『風土』での和辻の方法に関わる批判であって、主として人文地理学から提出されてきた批判である。また、第三の系列の批判は和辻とナショナリズムの関係を問題視する立場——典型的にはマルクス主義が挙げられる——から繰り返し提出されてきた批判である。

『風土』にこのような一連の批判を誘発する面があること自体は否定しがたいところで、これらの批判はどれも『風土』の持つ問題点の指摘として相対的な妥当性を持つものと思われる。だが、それはあくまでも一定の範囲内での相対的な妥当性であり、こうした批判のみで『風土』での議論をその意義も含めて捉えきれるとは思えない。

例えば、第一の系列の批判は、その著作第二章以下での風土の三類型の具体的描写において地理学的決定論に近い叙述が混入していることを指摘している点では正しい。だが、第一章での「風土の基礎理論」は、本稿で後述するように地理学的決定論を許容するものではなく。とすれば、第一の系列の批判の意義は、第一章での「風土の基礎理論」と第二章以下での風土の三類型の具体的描写との間にある乖離を明らかにした点に、そしてそれのみに求められる。つまり、和辻が「風土の基礎理論」で提示した自らの方法を風土の具体的描写において徹底することができなかったということ、第一の系列の批判はこの点を示唆する限りにおいて意義を持つと考えられるのである。だが、これは、言い換えれば、このような批判のみでは『風土』の核心にある和辻の基本的な発想——それは「風土の基礎理論」で素描されているような、そして第二章以下の風土の具体的描写においても随所に認められるような、人間と風土との関係に関わる現象学的解釈学の発想に他ならない——には一指だに触れ得ないということである。

第一の系列の批判の持つ限界は、凡そ以上のように捉えられる。これに比べれば、第二、第三の系列の批判の場合、事態はより微妙であって、これほど明白にそれらの批判が妥当する範囲を限定できるわけではない。その理由は、それぞれ次のようなものである。

まず、第二の系列の批判に関して言えば、この批判は和辻の異文化理解の方法に疑念を呈するという意味では第一の系列の批判と共通してはいる。だが、地理学的決定論が和辻の風土論の構想において明確に否定されているのとは異なり、第二の批判が問題にするような異文化理解（及び他者理解）の根幹に関わるテーマについて和辻の立場はさほど明確ではない。それゆえ、第二の系列の批判の妥当性を吟味するためには「風土の基礎理論」をはじめとする和辻の

方法論それ自体を精査する必要がある。

また、第三の系列の批判について言えば、このような批判は、『風土』に限らず和辻の思想と学問全般に対して向けられている批判でもあると見ることができる。したがって、『風土』に限定してこの系列の批判を吟味するとしても、まず、和辻の思想と学問全般における風土論の位置を見定める必要がある。つまり、第三の系列の批判の吟味のためには、『風土』という著作を越えて和辻が書き遺したものの全体をコンテクストとしてその風土論を捉え直す必要があるというわけである。

さて、以上のような事情であるから、第二、第三の系列の批判の妥当性の吟味のためにはそれ相応の議論の積み重ねが必要であることは明らかだろう。だが、本稿でそれらの批判それ自体を主題化し、詳細に論じる余裕はない。本稿では、以上の考察が示唆するところに従って、まず次節2では和辻の思想と学問における風土論の大まかな位置について、そして3では現象学的解釈学の系譜にある風土論という構想の実質について、それぞれを素描しつつ和辻の風土論が持つ可能性に関して若干の考察をしたいと思う。

2 『風土』と和辻倫理学

『風土』がヨーロッパ留学という和辻の実体験を基盤として書かれた著作であるということ、そして『風土』が旅行記として、また比較文化論として広く読まれてきたということ、これらのことは既に触れてきた通りである。また、そのような著作の成り立ちの経緯や一般の読者の受け止め方にもかかわらず、『風土』に旅行記や比較文化論としては括り得ない面があることも、これまでの論述から大凡明らかだと思われる。『風土』は一般には比較文化論の古典として広く親しまれてきたが、前節でも垣間見たようにそれ以上の重大な意義を帯びた著作だと言ってよい。このことは和辻の思想と学問の展開過程の中に『風土』を置いてみるときより鮮明になる⁴⁾。

和辻の思想と学問の展開過程をコンテクストとして『風土』を見た場合、注目すべき点は二点ある。

まず第一は、『風土』の内容が雑誌論文として発表された時期（昭和3年から昭和10年まで）が和辻の倫理学体系の構想と成熟の時期と重なっており、『風土』の構想と倫理学体系の構想とが同時進行的に進められていたという点である。『風土』が昭和10年に刊行されたことは既に指摘した通りだが、その前後に和辻は『人間の学としての倫理学』（昭和9年）『倫理学上巻』（昭和12年）という自らの倫理学体系に関わる重要な著作を矢継ぎ早に刊行している。

むろん、これら二つの構想は内容的にも連動しており、このことは、例えば、和辻の倫理学体系のキーコンセプトである「人間」——つまり、個人的であると同時に社会的でもあるという二重構造を持つ間柄としての人間存在——が『風土』の論述での前提とされ、また逆に、『風土』で前面に押し出された人間存在の空間的構造が『倫理学 上巻』で既に時間性ととともに人間存在の基本構造として取り込まれている点などに明瞭に見てとることができる。

以上のように和辻において、『風土』は倫理学体系の構想と強く連動する形で構想され、生成した。あるいはより強い表現を使えば、これら二つの構想が同時進行的に進められる過程で『風土』での議論は倫理学体系のうちに統合され、その不可欠の一部となっていったと見る方がより適切かもしれない。それは、後に昭和24年に刊行されることになる『倫理学 下巻』では風土論が倫理学体系の中で定まった位置を持つことになり、風土論が倫理学体系の必須の構成要素であることが明確な形を得ることになるからである。それに収められている『倫理学』全体の第四章は「人間存在の歴史的風土的構造」と題され、ここでは基本的には『風土』での議論の延長上にある議論が展開されているのである。これが、和辻の思想と学問における『風土』の位置を問題にする場合注目すべき第二番目の点である。

このような経緯を通覧するならば、和辻の思想と学問の展開過程のなかで『風土』での議論が重大な意味を帯びてゆく過程は自ずから明らかだろう。ヨーロッパ留学の体験に端を発した和辻の風土論は、和辻の思想と学問の成熟の過程で比較文化論としての意味のみならず、倫理学体系の不可欠の一部としての意味をも帯びるに至ったと言ってよい。

では、『風土』での議論と倫理学体系の一部としての風土論とは、どのような関係に立つと見るべきであろうか。

既に触れたように、『倫理学 下巻』での風土論も基本的には『風土』での議論の延長上にあると見ることができる。これは、言い換えれば、『風土』での議論が『倫理学 下巻』でも随所で生かされているということである。『風土』での議論は、大別すれば、風土の理論と風土の具体的な分析と分けられる。前者の中心部分は「第一章 風土の基礎理論」であるが、「第五章 風土学の歴史的考察」も風土の理論のための補助的な考察と見なすことができる。また、「第二章 三つの類型」、「第三章 モンスーン的風土の特殊形態」が後者に属するのは言うまでもないが、「第四章 芸術の風土的形態」も、風土の違いを手引きとして芸術様式の特徴の違いを捉えようとしているわけで、風土論の応用編と見なすことが可能である。このように分類した場合、風土の理論の中心部分は『倫理学』全編の骨格に関わる人間存在論に、また具体的分析の中心である風土の三類型の分析はほぼそのままの趣旨で『倫理学 下巻』に取り入れられており⁵⁾、こうした点に両著作の間にある連続性は顕著に認められると言ってよい。

だが、両著作はむしろ相互に独立した論考であり、両者の間に違いがないわけではない。主立った相違点を挙げれば、まず明白な違いとして二点指摘できる。一つは、『倫理学 下巻』では風土の類型として「アメリカ的風土」(『第十一巻』, p. 183-p. 186 参照)とロシアを念頭に置いた「ステップ的風土」(『第十一巻』, p. 186-p. 191 参照)の二類型が加えられている点である。また、もう一つ『倫理学 下巻』での新たな変更点として、19世紀以来の「人間の地理学」(『第十一巻』, p. 141, 142等)の発展について大幅な紙幅をさいて記述するなかで、本稿注(1)で言及したブラーシュの仕事を地理学的決定論に対する批判を含めて人間存在の風土的構造を捉える仕事に最も近づいたものとして高く評価している点が挙げられる。(『第十一巻』, p. 144-p. 147 参照)⁶⁾

『倫理学 下巻』で新たに書き加えられたこれらの記述は、『風土』での議論の不備を補完するための小さな変更だと解釈することも可能である。これらのうち、特に後者はそう見て差し支えない、というよりそう見るべきだと筆者にも思われる。後者の変更は、『風土』での和辻の基本的なスタンスが、地理学的決定論などではなく「第一章 風土の基礎理論」の現象学的解釈学の発想にあったことをあらためて強調する意味を持つ記述であって、『風土』と『倫理学 下巻』の本質的な連続性を示す傍証でもあるからである。

だが、前者の変更については後者の場合と全く同じように解釈することはできないと筆者には思われる。『倫理学 下巻』を読み進むとき「アメリカ的風土」と「ステップ的風土」の描写は唐突な、取って付けたような印象を読者に引き起こすと思われるが、この後者の変更は和辻倫理学の体系構成上の要請から行われた変更であり、『風土』と『倫理学 下巻』の際立った相違を暗示する変更であると考えられるからである。この点を明らかにするために、『倫理学 下巻』「第四章 人間存在の歴史的風土的構造」について、倫理学体系におけるその位置、及びその章での論理構成という二点にわたって若干検討してみよう。

和辻の『倫理学』は上・下巻あわせて序論と本論四章から組み立てられている。序論は措くとして、本論第三章までの章の名前を挙げれば、「第一章 人間存在の根本構造」「第二章 人間存在の空間的・時間的構造」「第三章 人倫的組織」ということになる。第四章に先行するこれらの章においては、人間存在の基本構造である主体的な時間性、空間性の分析、そうした構造から生み出される人間の行為の分析、無効の行為が織りなす行為連関の体系としての人間組織——つまり「人倫的組織」——の分析などが順を追って行われている。これら一連の論の組立てから体系構成上第四章と最も密接な関係にあるのは「第三章 人倫的組織」であることがまず明らかだと思われる。

その第三章では、「人倫的組織」の分析が、家族、親族、地縁共同体、経済的組織、文化共

同体、国家の順序で行われている。家族という最も私的な性格の強い人間組織から始まる「人倫的組織」のこの配列は、私的閉鎖的な人間組織から徐々に私的性格を脱して公共的性格を強く帯びてゆく、その度合いに応じてなされたものである。したがって、「人倫的組織」のこの配列は、「人倫的組織」の諸段階とも言うべきものであるが、注目に値するのは、国家が公共性の度合いを最も強く帯びた「人倫的組織」とみなされ、そのような意味で「人倫的組織」の頂点に置かれているという点であろう。

第三章までの以上のような体系構成から、第四章の風土論が国家という「人倫的組織」を機軸として組立てられるだろうということ、これは容易に予想されるところである。実際、人間存在の歴史的風土的構造を主題とする第四章での議論はそのようなものである。第四章で和辻は、「人倫的組織」の諸段階に応じて人間存在の主體的な時間性と空間性が具体化してゆくさまを描いているが、その具体化が質的に変化する転換点として国家を捉えている。国家という「人倫的組織」の出現とともに、人間存在の時間性の具体化は質的に変化してその自覚として歴史が生み出される。他方、同じく国家の出現とともに、人間存在の空間性の具体化も質的に変化しその自覚として風土が見いだされる。やや図式的に過ぎるが、大凡このような論理構成にしたがって第四章の議論は組み立てられていると言ってよい。次の文章は、人間存在の主體的な時間性、空間性という基本構造から「人倫的組織」が具体化し、その「人倫的組織」の進展の所産としての国家の出現とともに歴史性と風土性の自覚が始まるという和辻の基本的な見解が述べられているものである。

人間存在の時間性は対立を通じて合一する不斷の主体的な動きにほかならないが、かかる動きは主体がおのれの外に他の主体を見いだし、それと対立する、という主体的なひろがり、すなわち人間存在の空間性なくしてはあり得ない。が、またこの主体的なひろがりも、主体が多化することを通じてその統一を実現する運動、すなわち否定の道を通じてその本源へ帰るという帰來の運動なくしては、おのれを展開することができない。この相即不離の構造において、主体の間に動的即静的に作り出される連関が人間の行為であり、この行為において具体化される人間存在が人倫的組織である。従って人倫的組織は無数の行為によって編み出される行為的体系である。そういう組織が積み重なって大きい人倫的組織の統一、すなわち国家ができあがってくると、この組織内で具体化された時間的契機の体系的統一が歴史となって現われ、同じくこの組織内で具体化された空間的契機の体系的統一が風土として形成される。（『第十一卷』、p. 191, 192…傍点和辻）

この文章はいささか思弁的に過ぎるように見えるかもしれない。確かにその通りなのだが、和辻は国家の出現とともに歴史性と風土性の自覚が始まるとのこの指摘を人類史を通覧する視線のもとで具体的に描出してもいる。その際に歴史性の自覚の始まりに関わるものとして「時間が紀年となる過程」(『第十一卷』, p. 16…傍点和辻)が、また風土性の自覚の始まりに関わるものとして「国土あるいは領土の概念」(『第十一卷』, p. 111…傍点和辻)が主題化されている点は、この著作での和辻の基本的な立脚点を提示していて、いかにも象徴的である。和辻はこのように歴史性の自覚の進展と風土性の自覚の進展の起点として国家の創出を置き、それを出発点として歴史性、風土性双方のその後の自覚の深まりを描き出しているのである。

大凡このように『倫理学 下巻』では人間存在の風土性は歴史性と相即するものとして国家という概念との関係において取り出されている。歴史性と風土性との相即は『風土』にも明確に認められる主張である。だが、国家という概念を機軸として風土論を構成するという手法は、『風土』では少なくとも明示的には認められない。以上の分析からは、『倫理学 下巻』の風土論と『風土』の相違としてまずこの点を確認できたと言えよう。

ところで、国家という「人倫的組織」を機軸として人間存在の歴史的風土的構造を捉えようとするこのような主張は、『風土』では同じく潜在的なものにとどまっていた論点とも明確に繋がっている。その論点とは、端的に言えば、「世界史の意義」(『第十一卷』, p. 198等)といった言葉で言い表されるような論点であり、哲学史のなかでは歴史哲学という部門に属す基本的なテーマとして繰り返し論じられてきたテーマである。『風土』での和辻は、この問題についてはヘルダーやヘーゲルの歴史哲学の紹介という形で若干言及しているに過ぎない。それに対して、以上のような論理構成を持つ『倫理学 下巻』では、この問題は固有の伝統と風土を持つことでそれぞれの個性を具現している「国民的存在」(『第十一卷』, p. 192…傍点和辻)に関わるテーマとして強く前面に押し出されている。

このような文脈での和辻の主張は、「国民的存在」を世界史の主体としたうえで、それぞれの、そしてその時々「国民的存在」固有の価値を承認する世界史を構想しようとするものである。これは、思想史的に見れば、「世界史の意義を単に前後継起の秩序においてのみ把握せず、さらに並在の秩序において、すなわち諸国民にそれぞれその固有の地位や価値を認めるものとして、取り扱う」(『第十一卷』, p. 199)ことを夙に提案していたヘルダーの衣鉢を継ぐ主張であると言ってよい。また、現代風に言えば、これを文化相対主義、あるいは文化多元主義の主張と見ることもできるが、こうした世界史観、言い換えれば歴史哲学が『倫理学 下巻』での風土論が持つもう一つ別の一面であると言ってよい。このような文脈で捉えるならば、和辻の風土論は、「世界史の意義」に思いをめぐらす歴史哲学の一ヴァージョンなのである。

さて、以上のような脈絡を前提にしてここでの当初の問題に立ち戻るならば、『倫理学 下巻』で和辻が「アメリカ的風土」と「ステップ的風土」を風土の類型として付加した理由も自ずから明らかだと思われる。和辻は『倫理学 下巻』第四章第四節「世界史における諸国民の業績」において現在に至るまでの世界史の通覧を試みているが、執筆当時の世界情勢から見てその通覧の最後の記述として「アメリカ的風土」と「ステップ的風土」とを書き加える必要を感じたのだろうと思われる。（『第十一巻』、p. 344, 345 参照）先に書いたように、その描写に接して唐突な印象が否めないのは、こうした事情によると思われる。

3 『風土』の遺産

前節では、『風土』の構想が和辻倫理学の体系へとどのように統合され、そしてその過程でどのように変容したか、その様相を瞥見した。そこで確認できたことは、まず第一には、『風土』第一章で提示されているような風土論の核心部分、つまり現象学的解釈学による風土の基礎理論は『倫理学』上下巻の論理的骨格に関わる不可欠の構成契機として機能しているということであり、また第二には、『倫理学 下巻』の風土論に限定すれば、その風土論は和辻倫理学の体系構成上の要請から『風土』とは明らかに異なった面を持つようになっているということである。

第二番目の点として確認された『倫理学 下巻』の持つ一面、つまり「人倫的組織」の頂点にある国家や「国民的存在」に焦点を当て、それを主体とする世界史を構想する歴史哲学としての一面については、これをそのままの形で現在においても主張するとすれば、時代錯誤という謗りを免れないかもしれない。これに対して、『風土』と『倫理学』上下巻に共通する風土の基礎理論は、人間の経験、とりわけ人間の空間経験を理解するための手引きとしてなお多くの示唆に富む記述を含んでいると筆者には思われる⁷⁾。そこで、本節ではその基本的な論点について主として『風土』「第一章 風土の基礎理論」に的を絞って若干の検討を加えたいと思う。

『風土』第一章はその著作の序言とともに、風土論の構想に関するマニフェストであり、また第二章以下での具体的な分析に対する指針を明示する方法的な覚え書きでもある。そのような意味を持つ記述において和辻が最も力を入れているのは、当然のことながら風土論の問題設定を明確にすることだと言ってよい。風土、ないしは風土性という概念に関する誤解を防ぐこと、ヨリ具体的には風土と自然環境とを同一視するという誤解を防ぎ、そしてそれと同時に和辻が構想する風土論の雛形を具体的に提示すること、こうしたことに記述の力点は置かれてい

る。序言の冒頭ですぐさま次のように言われている。

この書が目ざすところは人間存在の構造契機としての風土性を明らかにすることである。だからここでは自然環境がいかに人間生活を規定するかということが問題なのではない。通例自然環境と考えられているものは、人間の風土性を具体的地盤として、そこから対象的に解放され来たったものである。(『第八巻』 p. 1)

常識的にはなかなか理解し難い文章であると思われるが、ここでまず自然科学の対象としての自然環境ではなく、「人間存在の構造契機としての風土性」に和辻が定位していることは明らかだろう。和辻は、言わば自然科学的な見方をひとまず括弧に入れ、そのような自然科学的な見方の基盤にある「日常直接の事実としての風土」(『第八巻』 p. 7)に定位して風土という現象を捉えようとしているわけである。このような問題設定の背景には、自然科学的な見方自体が人間に直接与えられている経験からのある種の抽象の所産であるという認識があるが、「通例自然環境と考えられているものは、人間の風土性を具体的地盤として、そこから対象的に解放され来たったものである。」という難解な表現はその認識を語るものである。したがって別の箇所で「ここに風土と呼ぶのはある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称である。」(『第八巻』 p. 7)と言われているとしても、それらは自然科学の対象としてではなく、人間に直接与えられている経験の次元で、言い換えれば「人間存在の構造契機としての風土性」に関わるものとして主題化されると言ってよい。これが『風土』の問題設定の第一の特色である。

自然科学的なものの見方を抽象の所産と見て、その基盤にある直接与えられる経験の次元に定位するというこのような問題設定は、一般的に言えば現象学や西田哲学と和辻が共有するものである。『風土』の場合、方法的にはハイデガーの『存在と時間』からの影響が強く認められるが、その影響が濃厚に現れている次のような叙述は、人間に直接与えられる経験に定位するという問題設定の具体的な例証と見ることができる。和辻が風土の現象をどう捉えているか、それを見る上でも格好の素材となると思われるので、やや長くなるが、引用してみよう。

我々がある朝「爽やかな気分」において己れを見いだす。これは空気の温度と湿度とのある特定の状態が外から影響して内に爽やかな心的状態を引き起こしたとして説明せられている現象であるが、しかし具体的体験においては事情は全く異なっている。そこにあるのは心的状態ではなくして空気の爽やかさである。…(中略)…空気が「爽やかさ」の有り方を持

つことは取りも直さず我々自身が爽やかであることなのである。すなわち我々自身が空気において我々自身を見いだしているのである。しかしまた空気の爽やかさは心的状態の爽やかさではない。それを最もよく示すものは朝の爽やかな気分が直接に我々の間の挨拶として表現せられるという事実である。我々は空気の爽やかさにおいて我々自身を了解している。(『第八巻』 p. 20, 21)

「空気の爽やかさ」は、むろん気候、あるいは気象に関わる現象である。だが、それは我々の在り方と無関係に存立する自然環境ではない。「空気の爽やかさ」に接するとき「爽やか」なのは、空気であり、同時に我々自身である。だから、和辻は「空気が「爽やかさ」の有り方を持つことは取りも直さず我々自身が爽やかであることなのである。」と言うのである。上記の引用文のすぐ後で和辻は「晴れた日の晴れ晴れしい気持ち、梅雨の日の鬱陶しい気持ち、若葉のころの生き生きとした気持ち」等々(『第八巻』 p. 21)を挙げているが、風土の現象とは、まずは、このように我々の在り方と不可分な形で我々が直接に経験する自然現象であると言ってよい。

だが、上記の引用文はこれにとどまらずに、それ以上のことをも語っている。それは二点にわたる。まず、「空気の爽やかさ」に接するとき我々は爽やかな状態にあるだけではない。我々は同時に自らがそのような状態にあることを了解している。だから、和辻は「我々自身が空気において我々自身を見いだしているのである。」と言うのだが、こうした点に着目して和辻は風土の現象を「人間の自己了解の仕方」(『第八巻』 p. 13)と見なしている。

しかも、その自己了解は私一人だけの自己了解ではない。「朝の爽やかな気分が直接に我々の間の挨拶としてせられるという事実」と言われているが、ここで念頭に置かれている挨拶とは「いいお天気で」「いい陽気になりました」(『第八巻』 p. 21)といったものである。このような挨拶が示しているように、「空気の爽やかさ」において自己を了解しているのは私一人ではなく共同存在としての「我々」なのである。とすれば、「我々は空気の爽やかさにおいて我々自身を了解している。」とあるように、風土の現象は、間柄として関わり合っている共同存在としての「我々」の自己了解の仕方と言ってよい。以上のように、和辻は風土の現象を人間——個人的・社会的という二重構造を持つ人間——の自己了解の仕方と捉えているが、この点を『風土』の問題設定の第二の特色と見ることができる。

むろん、風土を「人間の自己了解の仕方」と等置する措辞には、筆者としても若干の違和感を禁じ得ない。ただ、この場合の自己了解は自己を取り巻く何らかのものとの交渉の中で、あるいはより強い表現を使えば、自己を取り巻く何らかのものにおいて生起する自己了解である。

この点を補って考えるならば、風土を「人間の自己了解の仕方」と規定する和辻の見解はきわめて優れた着眼であったと考えられる。そうすることで、人間の様々な営みを風土的な自己了解の表現と見る視界が得られたからである。例えば、和辻は家屋の様式について次のように述べている。

家屋の様式は家を作る仕方の固定したものであると言われる。その仕方は風土とかかわりなしに成立するものではない。家は寒さを防ぐ道具であるとともに暑さを防ぐ道具でもある。寒暑のいずれがより多く防御を必要とするかによって右の仕方はまず規定されねばならぬ。さらにそれは暴風、洪水、地震、火事などにも堪え得なくてはならぬ。屋根の重みは地震に対して不利であっても暴風や洪水に対しては必要である。家屋はそれぞれの制約に適合しなくてはならない。…（中略）…これらのさまざまな制約がその軽重の関係において秩序づけられつつ、ついにある地方の家屋の様式が作り上げられてくるのである。そうすれば家を作る仕方の固定は、風土における人間の自己了解の表現にほかならぬであろう。（『第八巻』p. 12, 13）

家屋の様式は、特定の風土における人間の自己了解が表現されたものであるというのである。ここで指摘されているような事柄は、むろん家屋の様式だけのことではない。この引用文の前後で取り挙げられているものだけでも、料理の様式、着物の様式、その他の道具等々、さまざまなものを「風土における人間の自己了解の表現」と解釈することが可能である。そして、それは以上のように身近なモノばかりとは限らない。いわゆる文化的産物や習俗といった人間の振るまいに関わるものも、少なくとも原理的には「風土における人間の自己了解の表現」として解釈される可能性を持っている。『風土』第一章はそのような方法的な展望を開くだけの記述を含んでおり、第二章以下の風土の具体的な分析は、そうした展望のもとに行われたものである。次の文章は、そのような消息をよく伝えるものである。そこで、本論文では、結語に代えてこの引用をもって筆を置くこととしたい。

我々はさらに風土の現象を文芸、美術、宗教、風習等あらゆる人間生活の表現のうちに見いだすことができる。風土が人間の自己了解の仕方である限りそれは当然のことであろう。我々は風土の現象をかかるものとして捕える。従ってそれが自然科学的対象と異なることは明白である。海草を使う料理の様式を風土現象として考察することは、風土を単に自然環境と見る立場ではない。いわんや芸術の様式を風土的に理解することは、風土が歴史を離れた

ものでないことを端的に示すのである。(『第八巻』 p. 13, 14)

注

- 1) 批判の代表例としてはブラーシュ（飯沼浩二訳）『人文地理学原理』，岩波文庫 33-450-1，1970 年における訳者の「新版に寄せて」 p. 28, 29 参照。
- 2) 批判の代表例としては，バルク（篠田勝英訳）『地球と存在の哲学』，筑摩書房，1996 年，p. 155, 156 参照。
- 3) 批判の代表例としては，戸坂潤『戸坂潤全集 第五巻』，勁草書房，1967 年，p. 95-p. 102。
- 4) 和辻の思想と学問における『風土』の位置については先学が既に適切な論評をしており，本節での論述に当たっては以下の文献を参考にした。生松敬三『近代日本への思想史的反省』，中央大学出版部，1971 年，p. 110-p. 123。坂部恵『和辻哲郎』，岩波書店，1986 年，p. 102, 103。
- 5) 和辻哲郎，『和辻哲郎全集 第十一巻』，岩波書店，1962 年，p. 167-p. 183 参照。なお，これ以降，和辻の全集からの引用，参照箇所の指示は，本文中で巻数とページ数のみ記すことにする。
- 6) この変更が和辻の意識的な変更であったことは，昭和 23 年に『風土』に新たに付加された記述から明らかである。『第八巻』，p. 240, 241 参照
- 7) この点に限らず，和辻の書き遺したのものにはその記述のディテールにおいて教えられるところが多い。和辻の業績については毀誉褒貶が多いが，限定を付したうえでの再評価が必要な時期にさしかかっているのだと考えられる。この点については，佐藤康邦他編，『甦る和辻哲郎』，ナカニシヤ出版，1999 年参照。

引用文献・参考文献（和辻の全集以外は，注で触れたものは除く）

- 和辻哲郎，『和辻哲郎全集 第八巻』，岩波書店，1962 年
和辻哲郎，『和辻哲郎全集 第九巻』，岩波書店，1962 年
和辻哲郎，『和辻哲郎全集 第十巻』，岩波書店，1962 年
和辻哲郎，『和辻哲郎全集 第十一巻』，岩波書店，1962 年
湯浅泰雄編，『人と思想 和辻哲郎』，三一書房，1973 年
湯浅泰雄，『和辻哲郎』，ミネルヴァ書房，1981 年